

研修報告書 No 2

研修施設：佐川町立国保高北病院

四万十市国保西土佐診療所

一か月間の高知での研修はとても有意義なものでした。短い期間でしたが、尊敬できる医師や医療スタッフとの多くの出会いがあり、地域医療についての理解を深めることが出来ました。

高北病院では、浦口先生のもとで研修させて頂きました。内科の中でも細かく専門が分かれている大学病院とは違い、内科全般を担当しました。大学病院での医療と違う点は、高齢の患者さまが多いこと、慢性期の患者さまが多いことなどです。そのようなことから、先生方は患者の状態だけでなく、退院時は家庭や家族の状態も重大な点として考えている印象でした。1カ月の研修では、病棟以外に、検査室や訪問診療、デイサービスでの研修もさせていただきました。訪問診療も積極的に行われており、浦口先生が団長を務めている「ずっとここで暮らす応援団」の活動はとても印象に残っています。病院ではなく、最後まで家で生活したいと思っている人は少なくなく、高齢化が進み、核家族が多い日本では、今後さらに重要性が増す医療の形だと思います。病気を持っている人でも、安心して自宅での生活を送るためには、訪問診療、訪問看護、訪問介護など多くの支援が必要です。「ずっとここで暮らす応援団」は、自宅で医療を受けられる体制を作る活動をしています。スタッフは、医師、看護師、リハビリ、介護士など多くの職種の方がいて、それぞれの在宅医療に対し、強い使命感を持って活動をしていました。

四万十町の十和診療所でも、3日間研修をさせていただきました。その地域で唯一の医療機関であり、地域密着型の医療を体験できました。内科だけでなく、外傷や熱傷、関節痛などの幅広い診療をしていました。大学病院で昨年から研修をしていた私にとって、専門科だけでなく、どのような分野でも診療している家庭医療を初めて見る事が出来ました。患者本人だけでなく、その家族全員のことも把握していて、大学病院では体験できない地域医療ならではのものを勉強できたと思います。また、十和診療所は2人の医師が交代で休日や夜間の救急診療もしており、その地域では小児科の医師は1人しかおらず、お産のできる医療機関もなく、出産のできる病院へ行くには1時間かかると聞き、地域での医師不足を実感しました。

一か月の研修で、強く思ったことは、大学病院の専門に特化した医療と同じくらい、地域医療も重要な医療な形だということです。大学で勉強している学生は、どうしても大学病院での医療と比較して、地域医療に触れる機会は少なくなってしまうと思います。家庭医療を勉強できる大学はわずかしかありません。今後は、専門として家庭医療を学べるプログラムや施設が必要だと思います。

研修医の間に、地域医療の研修ができたことは、医師としての大きな財産になったと思っています。まだ、将来の選択科は決定していませんが、どの科に行っても、自分の専門科以外も見ることのできる医師になりたいと思います。